

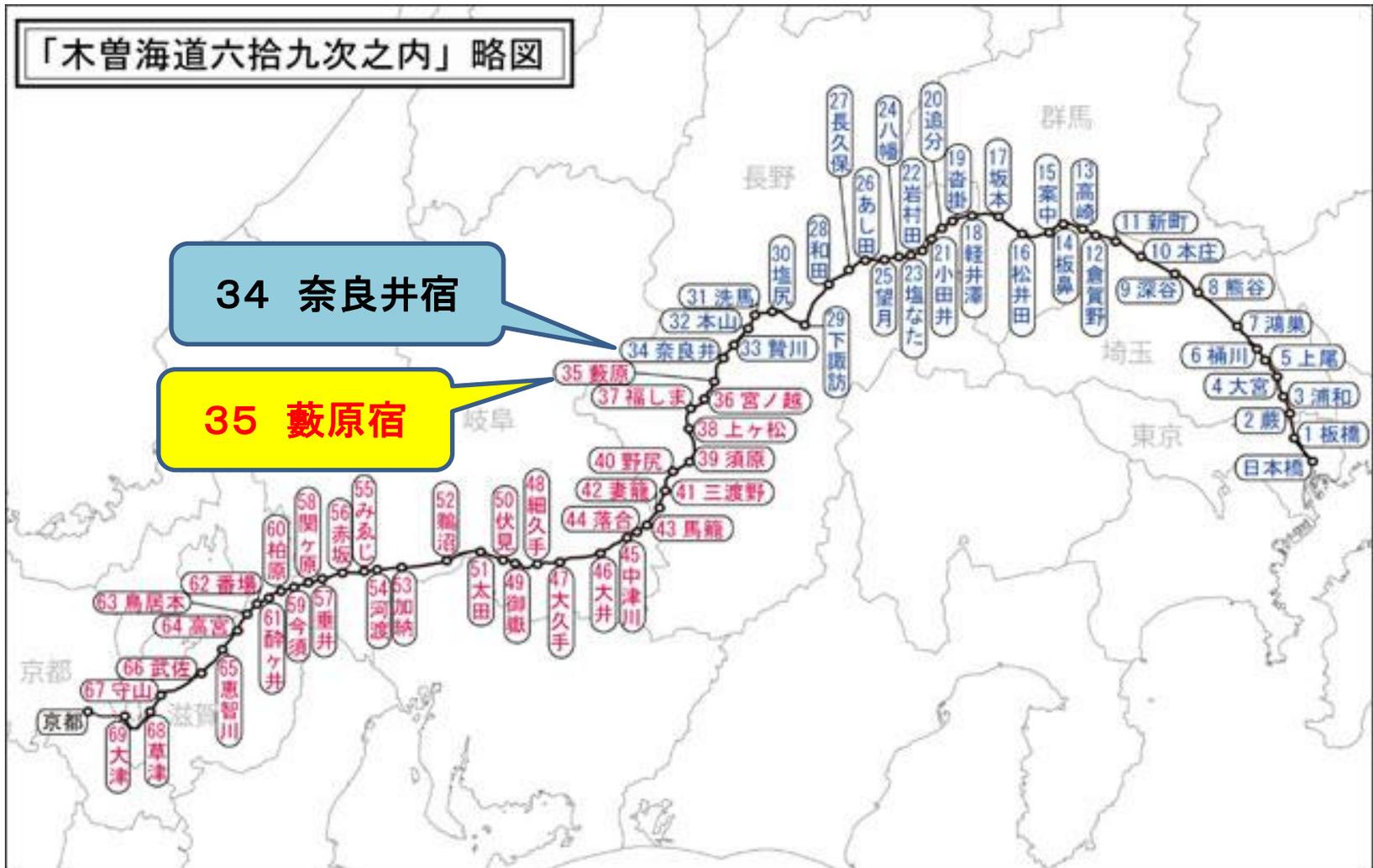
江戸勉強会木曾街道奈良井宿・藪原宿編



平成25年9月7日(土)～8日(日)

東藝術倶楽部

木曾街道奈良井宿・藪原宿の位置



奈良井宿



木曾路十一宿の江戸側から2番目で、11宿の中では最も標高が高い。難所の鳥居峠を控え、多くの旅人で栄えた宿場町は「奈良井千軒」といわれた。

江戸寄りから下町、中町、上町に分かれ、中町と上町の間には鍵の手がある。水場は、山側に6ヶ所ある。現在も重要伝統的建造物群保存地区として、当時の町並みが保存されている。

また、江戸時代から曲げ物、櫛、漆器などの木工業が盛んで、旅の土産物として人気があった。

天保14年(1843年)の『中山道宿村大概帳』によれば、奈良井宿の宿内家数は409軒、うち本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠5軒で宿内人口は2,155人であった。

江戸時代や明治時代の建築物が立ち並び、往時の面影を色濃く残す奈良井宿は、昭和53年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

重要伝統的建造物群保存地区とは・・・

伝統的建造物が建ち並ぶ地区の中でも特にその価値が高いとして国が選定した地区のこと。塩尻市は「宿場町-奈良井」と「漆工町-木曾平沢」の2つの重要伝統的建造物群保存地区を有した全国的に見てもめずらしい市である。



歌川豊国画「奈良井」



木曾六十九 奈良井 鳥居峠 鬼ヶ嶽
二代目尾上多見蔵 音羽屋
辻屋安兵衛
子の十一月

鳥居峠にあった木曾御嶽一の鳥居に因んで、「関取一ノ鳥居」の鬼ヶ嶽が画かれる。秋津島と鬼ヶ嶽の狂言の外題は「関取二代勝負附」であるが、安永4年(1775)4月中村座では「関取一の鳥居」の外題で上演している。秋津島と鬼ヶ嶽は、六角屋の家督を決める為に土俵に上がることとなる。鬼ヶ嶽は、秋津島が若殿の為とはいえ弟子達からの預かり金を用立てたことを罵り、雪駄でその額を傷つける。窮地に陥った秋津島は、切腹し臓腑をつかんで我が子国松の口に入れ、明日鬼ヶ嶽と勝負しろと言って死んで行く。鬼ヶ嶽は父の魂が乗り移った国松に敗れる。更に鬼ヶ嶽の悪計は暴かれ、六角屋の家督争いは収まり、お家は安泰となる。表題の周りには力士の化粧まわし、預かり金の小判、両人の名を記した取組ビラが画かれている。図の尾上多見蔵は弘化4年(1847)2月市村座「関取二代勝負附」で鬼ヶ嶽を演じている。



新宿発高速バス乗車の先着メンバーで～す！

上問屋資料館見学



木曾路奈良井宿 (きそじならいじゅく)

奈良井宿は古く鎌倉時代から宿駅としてその名を広く世間に知られていた。中山道六十七宿の内でも屈指の大宿で、俗に奈良井千軒といわれていた。時の流れによってその形体は少しは変わってゆくが、奈良井は現在でも昔の面影を残していることは全国でも稀にみる貴重な存在であるということで、昭和53年5月31日付で、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定され、永久に保存されることとなった。

上問屋史料館 (かみといやしりょうかん)

むかし宿駅には幕府の役人や諸大名その他の旅行者用として、幕府の定めた一定数の伝馬(宿駅用の馬)と歩行役(人足)を常備しておいて、旅行者の需に応じたのであった。

木曾11宿には1宿について25人の歩行役と25疋の伝馬を用意していたのである。この伝馬と歩行役を管理運営していたのが問屋(といや)である。問屋の下に数人の年寄役があつてこれを補佐したのである。

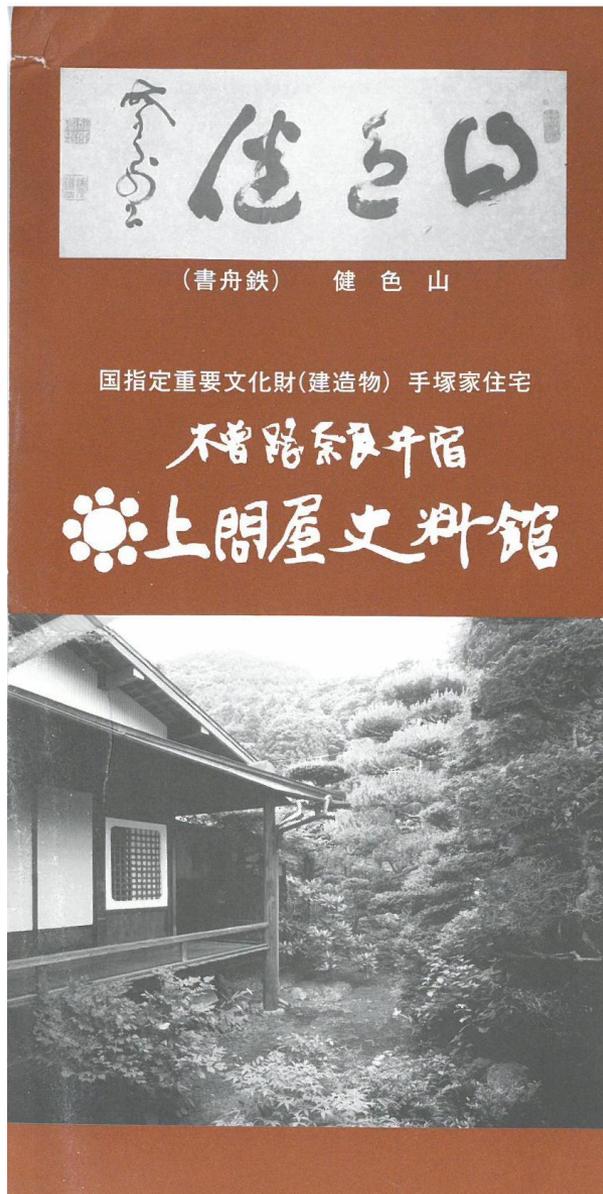
奈良井宿の上問屋は慶長年間(1602年)から明治維新までおよそ270年間継続して問屋を勤め庄屋も兼務したのであった。その永い間に残された古文書や日常生活に使用した諸道具等を展示したのがこの史料館である。往時を偲ぶよすがの一端ともならば幸いの至りである。



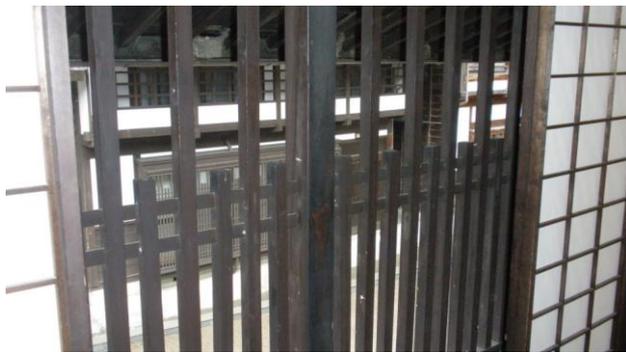
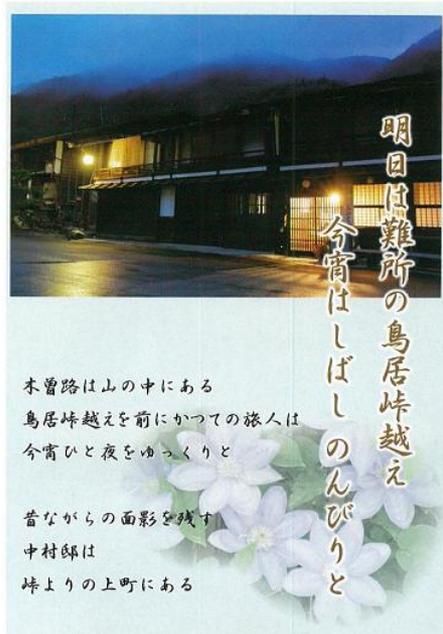
【展示品】 古文書 凡100余点 陶器・漆器その他 凡300余点
国指定重要文化財(建造物) 手塚家住宅

木曾路奈良井宿
上問屋史料館

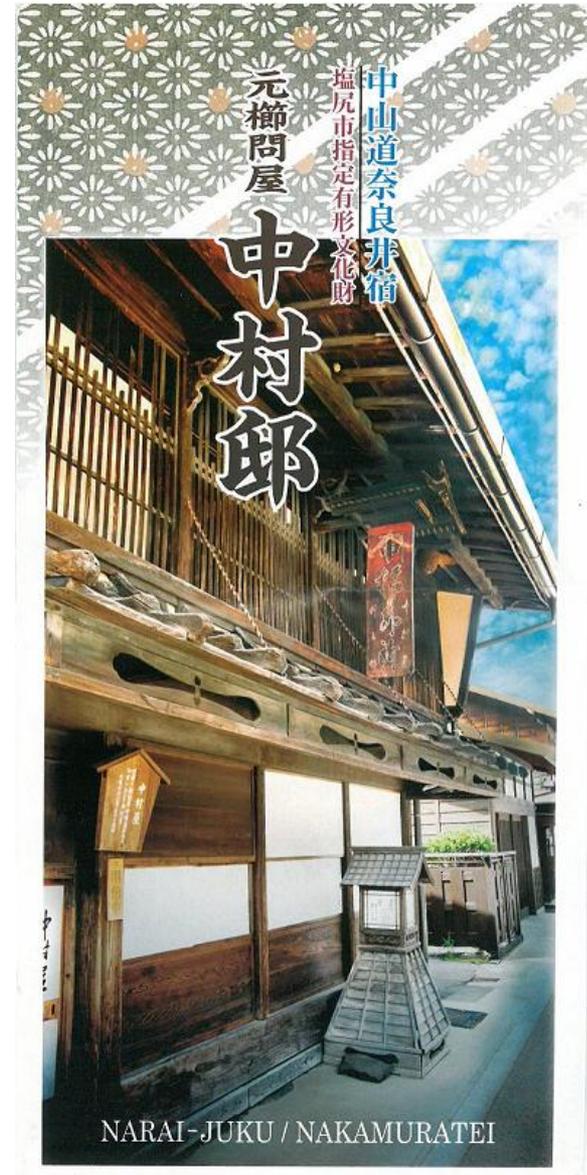
手塚 信司
長野県塩尻市大字奈良井379
電話 (0264) 34-3101



中村邸見学



格子越しにみる木曾街道



中村邸見学

この家は天保の櫛商人、中村屋利兵衛の屋敷にて候。



建物正面の猿頭をあしらった鏡庇、二階正面の格子と袖壁など、奈良井宿の町家の意匠を典型的に備えた建物です。入口から中庭まで土間が通り、ミセ・カッテ・ナカノマ・ザシキが続く間取りも奈良井宿の町家に共通して見られます。中庭の奥には土蔵が配されています。

格子戸くぐり戸
心安らぐ
たたずまい。

中村邸は

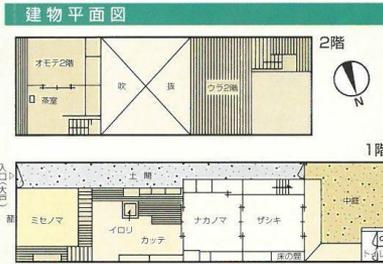
江戸の終り頃、塗櫛問屋として栄えた中村屋の建物です。奈良井宿上町に位置し、天保八年（1837年）の大火の後に建てられ国の選定重要伝統的建造物群の中の代表的な民家として一般公開されています。

この建物は奈良井の民家の中でも最も古い形を残しており、この民家の保存をきっかけに、奈良井宿の保存が始まりました。

中村邸は主屋は間口が狭く、奥行きが深い短冊状の敷地に、間口三間二尺、奥行き九間半の規模で二階建てです。一階より二階が少し前に出た「出梁造り」という中山道の宿場町の建物に多い形です。



裏庭に続く通り土間



一階座敷



二階座敷



奈良井宿散策



江戸時代にタイムスリップした気持ちになりました！

宿泊先のかとう民宿



とっても美味しい活性生酒
を飲みながらの夕食懇親会
そして続く二次会まで
池田顧問、キリロラ☆顧問
を囲んで楽しく夜遅くまで
大いに盛り上がりました！

二次会は眼下に木曾街道
が見える池田顧問の部屋
で！





翌朝、藪原駅への移動前の奈良井駅にて！

藪原宿



藪原宿は、火災のためその面影を見ることはできないが、中山道の難所であった鳥居峠越えのために栄えた宿場である。

天保14年(1843年)の『中山道宿村大概帳』によれば、藪原宿の宿内家数は266軒、うち本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠10軒で宿内人口は1,493人であった。

木曽川源流の地。木祖村の名は、木曽の「祖(おや)」という意味で名付けられた。北に鳥居峠、西には野麦峠が控え、飛騨から野麦峠を越えてやってくる女工たちが休息する場でもあった。

当時は「お六櫛(おろくぐし)」(長野県伝統工芸品)の産地として栄えたが、現在では需要の減少とともに職人も少なくなった。近年その伝統技術を受け継いでいくための「お六櫛研究会」が結成され、櫛材の育成にも力が注がれている。

昭和49年に建てられた「木祖村郷土館」では、製造工程やお六櫛の由来、当時の宿場の様子などを観ることができる。ここはまた上高地に入る南ルートの基点でもある。



お六櫛



わずか10cmにも満たない幅に、およそ100本もの歯が挽かれたみねばりの小さな櫛は、江戸時代から中山道の名物、御嶽信仰や善光寺参りの土産として全国に知られていた。

現在でも、蓺原宿を中心に作られているお六櫛は、実用品の櫛であるとともに長野県伝統工芸品として愛され続けている。

蓺原では一口に「お六櫛」と総称しているが、その種類は多岐にわたり、お六櫛はその用途と機能から大きく4種類に分けられる。さらにそれぞれに形や大きさ、歯のつけ方などの違いによって細かく分類され、名称がつけられている。

歌川国芳画「奈良井 おろく 善吉」



山東京伝の合巻『於六櫛木曾仇討』(文化4(1807)年)によって、お六(櫛)は江戸に紹介された。

曲亭馬琴の合巻『青砥藤網模稜案』(あおとふじつなもりょうあん)(文化8~9(1811~12)年)によって、この「おろく(お六)」と蚕屋「善吉」夫婦が主人公に据えられた。

この話は、善吉が旅先の木曾路の宿場で知り合ったお六を妻として木曾路で土産物屋を開いていたところ、善吉の別れた前妻の密通相手(故郷の村長)に冤罪を着せられるが、お六が訴え出て青砥藤網が事件を解決して善吉夫婦を救うというものである。

この『青砥藤網模稜案』は、日本や中国の裁判記録を題材に、青砥藤網の名裁判で事件が解決する形式に脚色したもので、絵は北斎が描いた。その後、弘化4(1846)年7月、市村座『青砥稿』(あおとぞうし)として歌舞伎で演じられている。

左の国芳の作品は、お六櫛が「奈良井」周辺で名産であったことに因んで、名物「お六くし」の店で出会ったお六と善吉を描いている。

標題は善吉の旅装束と旅道具で囲まれており、左上のコマ絵は櫛の形をデザインとし、中には御嶽山と木曾の山並みが描かれている。

歌川国芳画「藪原 陶晴賢」



「陶晴賢」(すえはるかた)は、周防国の戦国大名・大内氏の重臣であり初名は隆房(たかふさ)。天文20(1551)年に大内義隆を殺害し、義隆の姉の子・大友晴英(後の大内義長)を当主に据えてから晴賢と名乗り、その後、毛利元就との厳島の戦いに破れ自害している。

左の国芳の作品は、天正10(1582)年、山崎合戦で羽柴秀吉に敗れ、山城国の竹藪で土民に竹槍で刺されて落命する明智光秀を、当時の幕府の出版規制に従い、陶晴賢に見立てて描いている。

竹藪で腹を刺されるから藪原、標題も竹で囲まれている。

鎧の下には光秀の家紋「桔梗」の花模様が見えそれをコマ絵のデザインとしている。

歌川豊国画「藪原」



木曾六十九駅 藪原 山吹山 おふで
故六代目岩井四郎 大和屋
住吉屋政五郎
子の十一月
彫千之助 シタ売

藪原宿の山吹山から山吹御前を連想し、その侍女おふでを画く。「ひらがな盛衰記」三段目大津旅籠屋の場。源義経により木曾義仲は討たれる。おふでは父鎌田隼人と共に、義仲の奥方山吹御前・若君駒若丸の供をして木曾路を目指す。途中大津の旅籠で、娘小よし・孫槌松を連れた巡礼の老爺権四郎と相宿になる。そして夜半、梶原の家来に襲われた時、若君と槌松を取り違えて宿を飛び出す。隼人は斬られ、若君と思われ槌松は首をはねられ、山吹御前も絶命する。表題の周りには巡礼の装束、おふでが山吹御前の死骸を乗せて引いて行く笹が画かれている。図は討手と戦うおふで、衣裳には岩井家の三ツ杜若の紋が画かれている。六代目岩井判四郎は前名の二代目桑三郎時代の文政9年(1826)9月中村座「ひらがな盛衰記」でおふでを演じている。

木曾川源流の里

木祖村郷土館



藪原祭り・お六櫛資料館

木祖村郷土館は名勝鳥居峠のふもと、清らかなせせらぎの音がきこえる木曾川のほとりに、昭和50年3月開館しました。

当館は300年の伝統をうけつぎ、長野県伝統工芸品にも指定されている「お六櫛」をはじめとして、勇壮華麗な藪原祭り、山とともに生活してきた村の人々のくらしなど木祖村の貴重な資料を展示しています。

藪原宿や鳥居峠を散策しながら、木曾川源流の村の歴史、民俗、生活についてご覧くださり、木祖村をすこしでも知っていただければ幸いです。

1・2・3コーナー お六櫛

藪原宿は江戸時代から「お六櫛」に総称される木櫛の産地として全国に知られていた。ミネバリ(オノオレカンバ)を始めとする豊富な材料を得て、江戸時代から明治にかけての最盛期には、宿内のおよそ70%の人々が櫛の製造にたずさわっていたほどである。



ここでは、当時の櫛職人の仕事を再現するとともに、製造工程から道具、その他櫛に関する資料を展示している。



4コーナー 民間医療と尾張本草学

かつてこの村には5軒もの医者がいた。いずれも名医として知られ、近郷近在から多くの患者が集まってきた。

また、薬草の産地としても有名で、尾張の本草学者が訪れている。味噌川に由来するミソガワソウも再発見された。

ここでは、いわゆる民間医療にかかわる資料を中心に展示している。



(ミソガワソウの印刷図)

5コーナー 鳥居峠と村の文化

中山道の難所として知られた鳥居峠は木祖村のシンボルである。御嶽参りをはじめ多くの文人墨客が歌に詠み、文章に綴っている。

ここでは、いわば峠の文化ともいえる資料を中心に展示している。



(芭蕉句碑)



木祖村郷土館館長からお六櫛について詳しくお話を伺いました！

藪原宿散策



お六柳問屋のふさふさ
黒髪主人(70歳代)の
講釈が面白く、全員が
お土産にお六柳を沢
山買いました！
奈良井宿よりも格段に
安い価格です。

藪原宿にはからくり仕
掛けの面白い水車が
あります！





藪原宿は当日水祭りの日でした！ 湧水がとっても美味しいです！

木祖村公民館にて浮世絵勉強会



江戸時代の本物の浮世絵
を見て、触れて、感じて、
ゴッホが愛したユートピア
江戸日本の素晴らしさを
勉強しました！

鎮神社



御神木前にて

キリロラ☆顧問に素晴らしい歌声を披露して頂きました。
今回も超感動です！！

二日目の奈良井宿散策



再び江戸時代にタイムスリップした気持ちで散策です！



江戸人の気持ちで奈良井宿にて勢揃い！



奈良井大橋にて！

代表より締め言葉です！



奈良井大橋にて最後のポーズ！！

参加して頂いた皆さん大変お疲れさまでした！